

# 京都帝国大学における図書疎開 —附属図書館所蔵貴重和漢書の事例を中心に—

川口朋子 †

## はじめに

1937年に公布された防空法により、兵士以外の民間人にも空襲から都市を守る防空が国民の義務として課された。防空壕を掘ったり灯火管制を敷くなど銃後の国民が従事した防空は、軍防空と区別して民防空と称された。図書館の防空も民防空であった。敵機に見つかりにくいよう図書館の壁に迷彩を施す、貴重図書を所蔵する部屋をコンクリートで防護する、ガラスや火炎が館内に飛散するのを避けるため窓の外に砂嚢を積み上げる方法などが主流であった。これらは図書館という建築物を防護することで、所蔵する貴重な図書類を守ることを目的とする。それに比べ、蔵書を他所へ疎開させる方法は事業規模が大きく実施は容易ではなかった。

図書疎開に関しては図書館界での組織的、統一的動きは見られず、散発的で計画倒れに終わった事例も少なくないためか、資料による実証研究はほとんど見られない。一部の公共図書館において、戦前の図書館界が戦時下の思想統制を強め国民の言論・出版の自由統制に拍車をかけた事実への反省とともに、図書疎開事業の検証や記録化が行われているに過ぎない<sup>(1)</sup>。

高等教育機関として大量の蔵書を抱える帝国大学においても、どのようにして図書を疎開させたのか実態は不明な部分が多い。戦前期における高

等教育機関のうち、本格的な総合大学として附属図書館を有していた東京帝国大学と京都帝国大学に限れば、大規模な図書疎開を実施した事実は両大学の通史から明らかである<sup>(2)</sup>。しかし、通史ではその事実が記述されるにとどまり、一次資料を用いた研究は管見の限り見当たらない<sup>(3)</sup>。

2019年、図書疎開に関する資料を学内で調査した結果、附属図書館において未整理の資料二点を確認することができた。『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録附点検控』、『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』と題するこれらの資料は、1944年に作成された疎開図書の目録である。書名に加えて資料を作成した背景も詳細に記されており、京都帝国大学の図書疎開を明らかにする手掛かりとなると考えられる。本稿の目的は、戦争末期に京都帝国大学で行われた図書の疎開<sup>(4)</sup>について、今回確認できた一次資料を用いて可能な限り実証することである。東京帝国大学では、当時の附属図書館職員による記録や証言が残されており<sup>(5)</sup>、これらも援用しながら京都帝国大学の図書疎開について明らかにしてみたい。

## 1. 防空における図書疎開の位置付けと実施

### 1-1 公立図書館および官公庁

わが国で防空を目的とした疎開が本格的に展開する契機の一つは、1943年12月23日、東條内閣

† 京都大学大学文書館助教

で閣議決定された都市疎開実施要綱である。その前日の12月22日、文部省より全国の公共図書館に図書疎開の指示がなされた。

当日、文部省主催の「都道府県中央図書館長並図書館事務担当会議」が文部省第一会議室で開催された。通常の中央図書館長会議は、読書会や優先配給など戦時下の図書館が果たすべき責務に対して文部省側の訓示や指示が伝えられる場である。今回の会議では、国策として貴重図書の疎開を行うよう教学局文化課長よりはじめて指示があった<sup>(6)</sup>。ただし行政処分という位置付けで法的強制力はなく指導や推奨に留まったため、実際に行われた時期や規模は図書館によって異なる。「図書の疎開などは不急の計画としてきわめて冷淡に扱われていた時代<sup>(7)</sup>」であり、「労力・資材・運送・経費・疎開先での管理問題等々、どちらを向いても隘路又隘路の連続<sup>(8)</sup>」であると関係者には認識されていた。実施が困難であるため、図書疎開を行った公共図書館のほとんどは、防空体制の崩壊が国民の目にも明らかになった1945年3月の大都市空襲以後に着手している<sup>(9)</sup>。

文部省の指示を待たずに図書疎開を実施した例もある。着手時期が最も早いのは官公庁である。宮内省図書寮（現在の書陵部）は、対米開戦前の1941年9月から図書を含む貴重文化財の疎開を計画していた<sup>(10)</sup>。同年12月には疎開図書類と公文書類の点検および梱包作業を進め、1942年5月下旬から6月はじめにかけて武蔵陵墓地（東京都）の一部に建設した倉庫へ木炭トラックで搬出した。このとき疎開させた図書、公文書類は172,455点に及ぶ。疎開先には出納掛や整理掛が出勤し、閲覧や整理業務を行った<sup>(11)</sup>。その後も那須御用邸（栃木県）、軽井沢（長野県）、常照皇寺（京都府）など複数の場所へ疎開を実施した。

帝国図書館の場合、図書疎開を計画し始めたのは1943年10月であった。空襲が少ないと予想される山岳地帯と堅牢なコンクリート建築物がある

場所という条件で疎開先を探し、長野県立図書館に決定した。1943年11月から1944年8月まで3回にわたり、約13万3400冊の図書を疎開している<sup>(12)</sup>。

外務省は1944年1月から、帝国図書館や当時目白にあった蓬左文庫を訪ねるなど図書疎開の方法について調査を開始し、3月から大倉精神文化研究所（神奈川県）へ疎開を行った<sup>(13)</sup>。

## 1-2 東京帝国大学における実施状況

東京帝国大学の場合、1943年10月12日の「官庁ノ第一次地方疎開実施ニ関スル件」（閣議決定）に従い、法・文・経済の三学部と東洋文化研究所を疎開することに決定した。移転先となる施設を探した結果、大学と千葉県及び千葉市との交渉が実り千葉市立商業学校に決定し、11月下旬には文部省の了解を得た。三学部と研究所の蔵書に関しては、法文学部の貴重図書の一部は1944年3月7日と9月30日に成田図書館へ運び込んだことが確認できる<sup>(14)</sup>。7月に入ると、当時野田町にあった私立図書館、興風会図書館（現在の野田市立図書館）へ法学部図書館の蔵書を疎開し始めた<sup>(15)</sup>。講義室等の本格的な疎開は10月1日から開始する予定であったが、予定された10月1日が来ると東京帝大は疎開が実行不能に陥ったと判断し、文部省に計画の中止を上申した。千葉への大学移転計画は、結果的に一部の貴重書を疎開させるにとどまったと言える。

他方、理学部、文学部、史料編纂所の貴重図書類の一部は1943年末に附属図書館へ既に預けられていた。附属図書館では1944年3月に入ると本館の蔵書とともにこれらの図書の疎開先を探す準備を始め<sup>(16)</sup>、3月末には司書二名が成田図書館を訪れて書庫の見学や調査を行った<sup>(17)</sup>。最終的には「土蔵作りノ旧書庫ガ極メテ堅牢ニシテ環境亦好都合ナルヲ認メタルヲ以テ<sup>(18)</sup>」旧青洲文庫（山梨県市川大門町）を借用することに決定した。目

録の作成、荷造り用の木箱の確保、箱詰め、点検などに半年をかけ、同年8月10日から14日にかけて貨車に載せて蔵書を旧青洲文庫へ運び入れた。1945年6月には同文庫へ追加疎開も行っている<sup>(19)</sup>。

史料編纂所の場合は1944年1月に蔵書の疎開を所内で決定していたが、大学が疎開を一時見合わせる方針をとったため、同年3月から疎開先の選定を開始した。調査の結果、重要図書類は次の三か所へ疎開することが決定した。一か所目は都内の静嘉堂文庫（東京都世田谷区）、二か所目は同大学附属図書館が計画した旧青洲文庫への疎開に一部委託、三か所目は長野県上田市立上田図書館であった。各所へは同年8月に図書を搬送している。静嘉堂文庫では、その後同年12月と翌年2月の二回に一部入れ替えをし、同年3月に追加疎開を行った<sup>(20)</sup>。3月10日の東京大空襲後は、東京で編纂事業を継続するのは到底不可能と判断し、地方に疎開して業務を続行するよう所の方針を変更した。長野県上田市と伊那郡伊賀良村にそれぞれ上田文庫、伊奈文庫を開設し、図書を疎開すると同時に図書管理を行う職員を派遣した<sup>(21)</sup>。疎開させたものは図書だけでなく図書の利用環境にまで及んだことが伺える。

以上見てきたように、東京帝国大学の場合、蔵書の疎開について大学全体の一致した行動はみられなかったと言える<sup>(22)</sup>。部局で独自に疎開を計画し、追加疎開も度々実施していた。

## 2. 京都帝国大学附属図書館における図書疎開

### 2-1 図書館商議会で決議

1908年に京都帝国大学図書館商議会が設置されてから、附属図書館の運営に関する案件はここで審議されてきた<sup>(23)</sup>。1944年以降実施された図書疎開も図書館商議会の決議を経ているが、図書館商議会の当時の議事録は管見の限り存在しない。『京都大学附属図書館六十年史』によると、同年4月

17日に開かれた図書館商議会で「文献疎開の件」が審議された際、疎開場所は大覚寺（右京区）と岩倉公旧跡保存会（左京区、現在の国指定史跡岩倉具視幽棲旧宅）が候補に挙がった。将来的に第2次図書疎開の実施も予定しており、随心院（現在の山科区）、上賀茂演習林附属建物（左京区）、桑田郡保津村（現在の亀岡市保津町）にある個人所有の土蔵、阿武山地震観測所（大阪府高槻市）も候補地に挙げられている<sup>(24)</sup>。

図書館商議会の決議を受けて、すぐに具体的な準備が始まった。まずは、候補地の実地調査である。図書館職員は候補地を実際に訪れ、図書を疎開させるのに適切な場所かどうか検討を重ねている。調査を開始した段階では自前で場所を用意することも想定しており、大学の近郊や近隣都市にあった附置研究所も調査対象となった。そのため、調査範囲は京都市内では洛北（岩倉鞍馬方面、八瀬大原方面、上賀茂・西賀茂方面）、洛西（嵯峨方面）、洛東（山科方面）、京都府内では亀岡園部方面、大阪府、奈良県方面にまで及んだ。洛北方面のうち上賀茂・西賀茂（現在の京都市北区）には、京都帝国大学の気象学特別研究所（1926年開設）、上賀茂地学観測所（1909年開設）、農学部附属演習林上賀茂試験地（1926年開設）があった。大阪方面では高槻市を訪れ、同じく大学の阿武山地震観測所（1930年開設）や摂津農場（1928年開場）を調査している<sup>(25)</sup>。

調査の結果は、図書疎開の実施要領案とも言える「文献疎開案」にまとめられ、5月4日の図書館商議会へ提出された。それによると第1次図書疎開は大覚寺、保津村にある個人所有の土蔵、第2次図書疎開は随心院にそれぞれ決定した<sup>(26)</sup>。4月の商議会で審議された内容と少し変更がみられるのは、実地調査の成果であろう。

疎開地を選んだ個々の理由は不明であるが、「敵弾直撃ノ可能度、兵火以外ノ火災、盗難、運送ノ便宜、随時点検ノ利便、文献保存上ノ設備及湿度

等ノ見地ヨリ<sup>(27)</sup>」調査を行ったことから、ある程度の推測は可能である。図書疎開の目的が防空であることを考えると、疎開先を選ぶ際に最も重要な点は一般的に地形や場所性である。空襲による戦火は言うまでもないが、空襲で治安が混乱した場合に盗難が発生することも想定された<sup>(28)</sup>。図書を保管する環境として、川のそばや低地で湿度が高い場所、浸水の恐れがある場所も避ける傾向にあった。気象学特別研究所の場合、府立植物園（左京区）の北西隅に位置しておりすぐそばを鴨川が流れていること、摂津農場の場合、もともと淀川の水位が高く周囲一帯が排水不良地であったこと<sup>(29)</sup>などから、浸水の恐れがあると判断されたと推測できよう。

附属図書館の職員が点検のために訪れる利便性も考慮された。「文献疎開案」によれば、図書を疎開させた後、職員は月1回ないし数回の巡視を行う予定であった。実際に巡視や点検が実施されたかどうかは不明だが、年1回の曝書を実施し、研究上閲覧が必要な事態となった場合は職員が疎開地まで同行して閲覧をさせることを規定していた。大学で所蔵していた状態と同じ管理・利用環境を疎開地でも維持することを想定していた点は、前述した宮内省図書館寮や東京帝国大学の場合と共通する。

## 2-2 和漢書の目録作成、点検、荷造り、搬出

2019年5月、学内で附属図書館の疎開に関する資料調査を実施したところ、未整理の資料二点を確認した。どちらもA4判で、京都帝国大学の事務用紙を綴じた文書である。表紙にはそれぞれ『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録附点検控』、『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』とあり、作成時期は二点とも1944年6月である。作成者は前者が疎開文献点検係（貴重和漢書係）、後者は疎開文献点検係（貴重和漢書係）と疎開文献荷造係である。これらは附属図書館が図書疎開を実施

した過程で館職員によって手書きで作成された疎開資料の目録であった。以下、二点の資料を用いながら附属図書館の図書疎開について目録作成から搬出までをみていきたい。

1944年4月17日図書館商議会での決議後、実地調査と並行して疎開図書の日録作りも進められた。目録は、国宝、和漢書、洋書、特殊文庫（谷村本や近衛家本など）についてそれぞれ作成されたと考えられるが、本稿では蔵書の大半を占めていた和漢書に限定して述べる<sup>(30)</sup>。

4月21日、まず和漢書目録係が「本館所蔵貴重図書目録」（以下、点検目録）を用意した<sup>(31)</sup>。これは、附属図書館が1935年以降刊行してきた和漢書目録を元に作成したものと推測される。次に、附属図書館第三書庫の二階に配置されていた貴重和漢書の書架5列分ほどと、一階にあった法隆寺壁画資料について、点検目録との照合作業が行われた<sup>(32)</sup>。点検目録に記載された和漢書が書架に存在するかどうか、点数や整理作業の進捗具合を一点ずつ調査した<sup>(33)</sup>。点検目録に記載されていない和漢書でも貴重と判断したものが見つかった場合は、追加図書とした。こうして点検目録の情報を整理し、書名で五十音検索が可能のように並べ替え、疎開に必要な情報（格納した荷箱の番号等）を新たに追記したものが、『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録附点検控』（以下、疎開点検目録）である。

疎開点検目録によれば、疎開対象の和漢書は貴重性の高い順に最貴重図書<sup>(34)</sup>（に含まれる和漢書）、甲種貴重和漢書、乙種貴重和漢書と区別された。最貴重図書と甲種貴重和漢書が大覚寺、乙種貴重和漢書が個人所有土蔵へ運ばれている。

疎開点検目録には、「荷造冊（点）通号」という項目がある。これは書物番号であり、疎開点検目録にある甲種、乙種和漢書をそれぞれのグループ内で貴重性が高いと判断した順に1から通し番号を付与した。書物番号順に並べなおして目録化

したものが『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』(以下、疎開荷造目録)である。疎開荷造目録を見れば、書物ごとに大覚寺(疎開荷造目録では甲と記載)と個人宅(乙と記載)のどちらへ運搬したかという搬入先と、その際に収められた荷箱の番号を容易に把握することが可能である<sup>(35)</sup>。例えば「甲1」という記載は、その書物が大覚寺へ運ばれた荷箱のうち荷箱番号1に収められたことを示す。和漢書目録係が最も貴重性の高い和漢書と判断したものにあたるが、該当したのは宗教や哲学関係の図書であった。神道史や禅宗、仏教各宗雑論、書経・歌経、四書など全部で49点である<sup>(36)</sup>。一部の貴重和漢書に関しては、疎開地と荷箱番号に加えて「秘」という文字も付された。個人所有土蔵へ疎開させた43箱の荷箱のうち番号が43、つまり最終番号の荷箱に収められ和漢書は「乙43」ではなく「乙秘43」と記され<sup>(37)</sup>、秘本として扱ったことが分かるが、詳しくは後述する。

荷造りの際は、通し番号順に一定の容積になるまで箱に収め、順次荷箱番号を付与し梱包した<sup>(38)</sup>。荷箱の形状や大きさについては不明だが、物資不足の時代において、荷箱や包装用の荒縄が確保できたかどうかも定かでない。帝国図書館の図書疎開に関する東京帝国大学の調査報告書(1944年4月作成)によれば、当初木箱を使用していたが木箱が入手不可能になるとハترون紙に図書を包み、藁でできたこもをかけて荒縄で包装したという<sup>(39)</sup>。

梱包が済むと、いよいよ搬出である。3054点の和漢書は大覚寺行き28箱、個人宅行き43箱の荷箱に区分して収納された<sup>(40)</sup>。大学農場所有のトラック1台を借用し、運搬中は常に責任者である図書館職員が付添い、監視を行った<sup>(41)</sup>。東京帝国大学の場合は、疎開地で先発の職員が待機して図書の到着を待つなど、先発隊と後発隊で役割分担がなされていた<sup>(42)</sup>。京都帝国大学附属図書館の場合は不明だが、先発隊があったとすれば疎開場所の鍵の受け取りや、関係者への挨拶回りを事前に済ま

せて搬入の準備を整えていたと考えられる。

1944年6月11日、甲乙どちらかは不明だがいずれかの疎開地へトラックが出発し、搬入、最終点検を終えて大学へ戻ってきた。13日、もう一つの疎開地へ同じようにトラックが出発し、図書を運搬した。こうして、図書館商議会で図書疎開の実施を決議してから2か月後、附属図書館の第1次図書疎開は終了した。

### 2-3 疎開させた和漢書の内訳

では、どのような和漢書が疎開対象に選ばれたのだろうか。疎開点検目録と疎開荷造目録では、記載された書物のほとんどに「図書番号」という番号が付されている<sup>(43)</sup>。これは附属図書館の和漢書分類番号であり、書物の内容を和漢書の部門と分野で表現している。図書番号を手掛かりにして、疎開させた和漢書を部門別に分類したものが表である。表によれば、文学語学部門が最も多く809点である。これは第1次図書疎開の和漢書全体の28パーセントにあたる。次に多いのは歴史地理部門568点であり、宗教哲学教育部門が539点と続く。経済社会や産業に関する書物は非常に少ない。

文学語学部門のなかには、前述した乙秘43に該当する秘本96点も含まれている。秘本の書名を具体的に挙げると、『御前獨狂言』(井原西鶴、宝永

表 疎開図書(和漢書)の部門別点数一覧

部門	点数
宗教 哲学 教育	539
法律 政治	48
経済 社会	10
文学 語学	809
歴史 地理	568
理学 博物	45
医学	398
工芸 武技	106
産業	12
全書 叢書	322

出典：『本館所蔵貴重和漢図書 疎開荷造目録』(京都大学附属図書館所蔵)

注) 部門は京都帝国大学附属図書館分類による。

2年)、『好色江戸紫』(石川流宣作、古山師重画、貞享3年)、『魂胆遊蟬窟』(不知足散人作、鈴木春信画)、『催情記』(明暦3年)、『色道後日男』(江島其碩作・西川祐信画)などである<sup>(44)</sup>。すべて「元禄文学」に分類されており、その特徴は高い娯楽性である。戦時中は戦意発揚を妨げ精神を墮落させるものとされていたため、疎開の事実を特に秘匿したと考えられる。文献疎開案によると、1944年5月時点では秘本として疎開させる予定の和漢書は153点あり、状況次第では疎開を留保する可能性もあった。すなわち、疎開対象の和漢書の中では重要度が二次的であったためか、荷箱の数が足りないなど何らかの不具合が発生した場合は館内で所蔵しておく予定であった。結果的には153点のうち約6割にあたる96点を疎開させたことになる。

その他の特徴として、医学部門の書物398点のうち360点が「和漢古方 按摩」に分類された書物であることを指摘したい。なぜこれほど多くの漢方医学の書物を疎開させたのか分からないが、和漢書分類の分野別にみると「和漢古方 按摩」は最も点数の多い分野である。

#### 2-4 疎開図書の貸出

疎開した図書は、「研究上閲覧ヲ必要トスル事情起リタル場合ハ責任アルモノ同道立合ノ上閲覧ノ便宜ヲ図ル但シ貸付ハナサズ<sup>(45)</sup>」とされた。疎開地では、附属図書館の利用環境のうち閲覧を維持しようとしたことが伺える。ただ、実際は閲覧や貸出を申し出る利用者はあまり想定されていなかっただろう。1944年4月に仮閲覧室と第二閲覧室を併合させた事態に象徴されるように、学徒動員や勤労働員に伴い図書館の利用者は減少しており、閲覧業務も縮小していた<sup>(46)</sup>。

ところが、1944年9月下旬、靖国神社内にある遊就館から、所蔵資料を借用したいという申し入れがあった<sup>(47)</sup>。同年秋の靖国神社大祭で行う展示

「総武装の歴史を物語る」に陳列するため、「賀茂行幸図」(森寛斎筆)一幅を貸してほしいというものである。当該資料は附属図書館が所蔵する資料の中でも、尊攘堂で所蔵する最貴重品であった。大覚寺へ疎開中であったが、沢瀉久孝館長と司書官は差し支えないと判断し、直ちに次のように返答している。

当図書館管理ノ尊攘堂所蔵品中館外不出ノ最貴重書品ニ所属致シ、現在ハ某遠隔地ニ疎開中ノ処御依頼ニ依リ特ニ疎開所ヨリ搬出ノ上郵送致候次第ニ付キ御取扱上特ニ御注意被下様願上候尚御受領ノ際ハ至急借用証本館宛御送付相成度右発送御通知申上度如斯候<sup>(48)</sup>

遊就館での展示が好評だったため、「賀茂行幸図」は当初の貸出期間が延長され、返却の際も東海道線や中央線等鉄道の故障により郵送できない事態に陥り、予定を大幅に遅れて返却された<sup>(49)</sup>。附属図書館の疎開図書が、疎開中にもかかわらず外部へ貸し出されたという非常に稀な事例であったと言える。

#### 2-5 第2次図書疎開

1945年に入ると、3月10日未明の東京大空襲を嚆矢とする夜間大空襲により大都市が次々と焦土と化した。3月18日「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、4月1日から1年間、国民学校初等科を除くすべての学校で授業が完全に休止されることになった。京都帝国大学を取り巻く防空も大きく進み、5月22日「戦時教育令」により教職員・学生による学徒隊が学部・学科・学年などを単位として組織された<sup>(50)</sup>。附属図書館でも学徒隊を結成するとともに、全学的な木造建物の取り壊しの一環で第一書庫、第二書庫、第三書庫をそれぞれつなぐ木造の渡り廊下、教官閲覧室や作業部屋、玄関付近と廊下、書庫の西側にあった木造建物の

廊下や便所を選定した<sup>(51)</sup>。

1944年5月の文献疎開案で、第2次図書疎開の実施も見据えていたことは既に述べた。ただし実施する時期は未定であったため、実施を決定するには何らかの要因があったはずである。『京都大学附属図書館六十年史』によれば、第2次図書疎開は、京都府通牒「文化財資料緊急疎開ニ関スル件」を受けて実施している<sup>(52)</sup>。しかし通牒を史料で確認することができず、いつ発せられたものかわからないため、第2次図書疎開の開始時期は不明と言わざるを得ない。第2次図書疎開の荷造りが終了したのは1945年7月20日前後であるため<sup>(53)</sup>、通牒が発せられたのはおそらく同年6月末から7月初旬と推測する<sup>(54)</sup>。

府の通牒は内政部長、警察部長の連名で、府下の文化財所有団体に疎開を実施するよう勧告するものであった<sup>(55)</sup>。通牒の内容は次の通りである。

標記ノ件別紙要領ニ依リ実施候条御了知ノ上至急御手配相成度追而実施ニ関スル詳細ハ内政部学務課ト打合相成度尚本疎開ハ比較的安全ト思料サル一箇所ヲ選定スルモノニシテ絶対安全ヲ保証致シ難ク候条御諒承相成度申添候<sup>(56)</sup>

附属図書館側は第2次図書疎開の場所を随心院と考えていたが、通牒を受けて「山科は京都の都心部よりやや遠いが市内であることには変わりはなく、市内空襲の恐れもあるため、京都府通牒の主旨に添い<sup>(57)</sup>」、京都府北桑田郡の国民学校へ変更した。このことから、通牒にある「別紙要領」のなかで府は京都市内への疎開を避けるよう指示していたことが推測できる。

相談窓口とされた内政部学務課は、府内の幼稚園、国民学校、中等学校、高等女学校、青年学校、実業学校等の学校事務を統括する組織であった。1945年3月以降、京都市内では国民学校初等科児童を市外へ疎開させる学童疎開が本格化していた。

京都府側は府下の学校を図書等の疎開先として想定していた。学童疎開を通じて学務課が有する現地との連絡手段を使って疎開を実施しようと考えたのであろう<sup>(58)</sup>。実際に京都帝国大学の図書疎開を受け入れたのは京都府北部や南部の国民学校であった。具体的には、北桑田郡知井国民学校（現美山町）、同郡神吉村神吉国民学校（現南丹市八木町）、周山国民学校（現京都市右京区）、網野国民学校（現京丹後市）および京都府林業種苗場（現京都市右京区）である。疎開場所の数が多いのは附属図書館の第2次図書疎開では、附属図書館だけでなく他部局の蔵書も府の斡旋により疎開させたためである。

内政部は、京都帝国大学から疎開先となる国民学校までの道路状況や所要時間に関する情報も一部所持していたことが確認できる。京都府は府内数か所の道路を「戦時重要物資輸送道路」に指定していた。1944年8月、改良工事に必要な情報を収集するため、内政部長の川井章知が実際に視察を行っている。北桑田郡知井村の中を通る府県道知井京都線も戦時重要物資輸送道路であった。1944年8月の視察の対象に含まれており<sup>(59)</sup>、内政部長は自動車で知井村へも訪れた。その結果、「府庁より（知井村まで：注筆者）自動車で往復約10時間」という情報を得ている<sup>(60)</sup>。

知井国民学校で受け入れた図書は、少なくとも附属図書館と文学部の図書併せて36100冊、960包に及び、知井国民学校の特別教室と講堂兼体操室に保管された<sup>(61)</sup>。『知井小学校百年誌』には、「京都大学図書館が周山小学校に疎開すべく図書を輸送して来たが、周山小学校では全部保管出来ず、残り六百冊を知井小学校に保管し、終戦後返却する」という記述がみられ<sup>(62)</sup>、当初予定していなかった図書も緊急で受け入れていたことがわかる。

第1次図書疎開は附属図書館が主体的に企画から実行まで携わったのに対し、第2次図書疎開の特徴として京都府の斡旋により実施し、郡部の国

民学校校舎を利用したことを指摘できる。

### 3. 文学部の図書疎開

#### 3-1 実施への懸念

附属図書館の他にも、図書疎開が実施された部局・研究室を断片的にはあるが確認できる。大学文書館に移管されている文学部教授会資料からは、大学の統一の方針に対して文学部が独自の方策を模索した様子が伺える。

1943年10月2日、在学徴集延期臨時特例により学生に対する徴集猶予が停止されると、文学部、法学部、経済学部、農学部（農学科、農林生物学科、農林経済学科のみ）学生の6割から7割程度が同年12月に徴集され、陸軍や海軍へ入隊した。文学部の場合、このとき徴集された学生は在学者476名のうち302名にあたる63.2パーセントであった<sup>(63)</sup>。大学に残留した学生は、勤労働員の強化により宇治、太秦、愛知県豊川など各地の工場へ動員される日々を送っていた。応召による職員不足も目立ち始め、当時の文学部図書室は、哲学科と文学部の閲覧室では「利用者殆トナシ現在夜勤者得難シ<sup>(64)</sup>」という理由から開室時間を午前9時から午後5時に短縮した。夜勤担当職員がいた史学科は、従来どおり午前9時から午後7時まで開室していた。

文学部教授会議事録においてはじめて図書疎開の記述が見られるのは1944年4月24日である。当日の教授会では図書館読書指導委員会委員の選出が協議された際、4月17日の図書館商議会において附属図書館の貴重書の疎開が審議されたことが報告された。この時点では報告のみで終わり、文学部として図書疎開を行うかどうかという議論には至らなかった<sup>(65)</sup>。当時の教授会は、割り当てられた勤労働員への対応や動員学生への講義や試験、卒業論文や口頭試問の取り扱いなどの対応に追われて、利用者のほとんどいなくなった図書室への認識は優先順位としては低かったのかもしれ

ない。

文学部の図書疎開が教授会で議論されたのは、それから1年以上が過ぎた1945年7月6日であった。附属図書館の第2次図書疎開の一環で、文学部教授会にも照会がかかった時であった。図書疎開を強化すべく、「京都府の斡旋に依り左記箇所へ疎開を急速に実施することとなる 葛野郡小野郷村 北桑田郡細野村 宇津村 知井村各国民学校及び芦生演習林事務所<sup>(66)</sup>」と事務官より報告された。大学全体として今回の図書疎開では約10万冊の疎開を予定しており、1週間後の7月15日に完了させたいという話であった。行政の斡旋による疎開という方法は文学部にとっても初めてであり、教授会では疎開先が国民学校であるという点に不安の声が集中した。教官たちの反対は、帝国大学の研究資産である貴重な蔵書を国民学校に預けて保管責任をきちんと果たしてくれるのかという懸念と捉えることもできよう<sup>(67)</sup>。

だが、反対の理由はそれだけではなかったようである。教授会では、図書費を使って各研究室の判断で独自に疎開したいという希望が出た<sup>(68)</sup>。文学部教授会では図書疎開のことを「集合疎開」と称するなど、全学で一致した行動を取ることにある種の抵抗があったように見受けられる。この理由については後述する。

「集合疎開」を希望する教員については、当日夕方までに図書の冊数と現況、30～50冊ずつ包装した場合の個数を附属図書館へ通知するよう求められた。前述した知井国民学校の例から文学部がこれに応じたことは明らかであるが、大学全体で10万冊の図書を1週間で疎開させることは無理であった。文学部の蔵書は7月半ばまでに疎開させることを目指したが、実際は予定より遅れ8月5日までかかった。このとき、各講座が所有する図書は附属図書館へ「寄託」という形で取りまとめられ<sup>(69)</sup>、国史・東洋史・西洋史・支那哲学史<sup>(70)</sup>・社会学に関する対象図書5500冊、220包が知井国

民学校へ運び込まれた<sup>(71)</sup>。

### 3-2 新たな疎開先

附属図書館による全学的な図書疎開が進む一方、文学部の一部教官は独自に別の疎開地を探し始めた。国史専攻では、図書委員であった教授西田直二郎を中心に調査した結果、新たな候補地を決定した。ちょうど文学部の「集合疎開」が終了した8月初旬であった。新しい疎開地は、滋賀県栗太郡上田上村国民学校校舎であった。文学部の庶務掛では、滋賀県知事、栗太郡上田上村村長、上田上村国民学校の三者へそれぞれ図書疎開の受け入れを願ひ出る落合太郎文学部長名の文書を送付した。大学文書館にはその写しが残されているが、三種類とも8月11日付で作成されている。文面はほぼ同一だが、滋賀県知事稲田周一へ出した書面は次の通りである。

拝啓陳者時局に鑑み學術資料保存の為此度京都帝国大学文学部国史関係重要研究史料並貴重図書貴県下栗太郡上田上村国民学校校舎の一部に疎開致度計画相立候に就而は特別之御配慮に預り度此段御依頼申上度如斯候  
追而右に関し近日文学部教授西田直二郎参上拝面之上委細申述御依頼可申上候 敬具<sup>(72)</sup>

上田上村国民学校長へ充てた書類では、特に「近日愈々搬入致度候御諒承願度候尚何分之御高配冀上度候」とある。先方と十分に交渉する間もなく図書の搬送を急いだことが伺える。しかし、西田が訪問を予定していた矢先に敗戦を迎え、疎開が実施されることはなかった。

### 3-3 抵抗の史的背景

文学部国史専攻が独自に探し出した保管先は、場所こそ違うが同じ国民学校であった。非常時にも関わらず全学的な図書疎開に歩調を合わせるこ

とを潔しとしなかった理由は、大学における図書館業務の史的経緯と関係があるのではなかろうか。

京都帝国大学では、附属図書館が開館した1899年に法科大学、1906年に文科大学が設置されたが、分科大学はそれぞれ独自の図書取扱規程を有していた<sup>(73)</sup>。図書業務に関して各部局は独自の方法で研究教育に供し、独立性が強かったと言える。附属図書館設立以降、図書の受入・登録に関しては附属図書館で行う中央登録制を採用してきたが<sup>(74)</sup>、各部局が購入した図書は、図書館で必要な手続きを済ませた後はそれぞれの部局に備え付けられていた<sup>(75)</sup>。

1933年に東京文理科大学附属図書館が行った調査結果によると、当時の京都帝国大学は95万冊の蔵書を有し、そのうち約半数は学部で所有していた。法学部と経済学部の図書室で約30万冊を所蔵し、司書以下の職員も置いていた。文学部図書室の蔵書数は約22万冊で、図書室内を哲学科と文学科に区分し、史学科は別館として陳列館に設置されていた。その他、理学部のように各学科で図書室を持つ部局もあった<sup>(76)</sup>。

大学として図書業務を中央管理にするか否かという問題は現在の図書館行政にも通じるが、京都帝国大学の場合、附属図書館開館まもない時期から論点となっていた<sup>(77)</sup>。公式の場である図書館商議会の議論を見ると、1913年9月12日に開かれた第9回図書館商議会において、臨席した澤柳政太郎総長の提案により図書業務の一元化がはじめて議題となった。澤柳総長は、かねてより図書行政を合理的に統一することを望んでおり、各研究室には研究上不可欠な文献のみ配置し、なるべく多くの図書を附属図書館に集中させるべきと考えていた。各分科大学の図書取扱規程も統一させる必要があるとした。折しも、大学全体の図書の総合目録を出版しようという案があり、統一させる良いタイミングだと考えたのであろう。しかし、委員からは「別段、今日までのやり方に不満を持っ

ていないのに、統一を強行されては困る」「それぞれの分科大学の図書の特異性を考えたうえでの規程だから。従来そのままがいい」と反対意見が噴出し、結論が出ないまま終了した<sup>(78)</sup>。

1916年の第11回商議会では、従来会議の主たる議題とされてきた翌年度図書館予算案の審議を、以後とりやめることになった。そのため少なくとも1年に1度開催されてきた図書館商議会は、数年間開催されない場合もあり、図書業務の中央管理に関する審議もみられない。

1929年6月10日に開催された第13回商議会では新城新蔵総長も出席し、新村出館長が提出した「図書館新営案」が審議された。「図書館新営案」は第9回商議会のものより検討を重ねたものであった。図書行政の統一化をさらに推進し、特に全学的な図書系事務の統合を意図していた。具体的には、管理部、中央図書館部、各学部図書整理部の3系統を敷き、各学部図書整理部の下にはとりまとめの司書官を2名配置する。各司書官の下に各学部の図書系職員（司書、嘱託、雇）が所属するという案である。すなわち各学部には司書が1～2名<sup>(79)</sup>と雇員若干名が所属し、彼らが図書業務を担うこととなる。附属図書館は中央図書館と位置づけ、附属図書館に由来から属している図書館商議会が指導的立場で各学部に関与する、というものである。新村館長の提案は、整理・運用だけでなく図書系職員の統合も意図する大変意欲的なものだった<sup>(80)</sup>。だが、このような中央集権的な方法は、図書業務を敏速に進めるに効果があると評価されつつも、議論は難航し結論は次回に延期された。第14回商議会（6月27日）、第15回商議会（10月24日）でも議論が続いたが、学部の反発は強く遂に実現には至らなかった<sup>(81)</sup>。

以後、図書業務の中央管理が公式の場で議論されることは戦後まで見られない。篠塚は「総長・館長の提案でさえも、ついに実現できなかったのは、法・経や文の学部図書室自体が、当時の他の大学

図書館以上の蔵書を有していたこともその背景として考えておくべきことであろう」と指摘する<sup>(82)</sup>。独自の図書取扱規程と、膨大な蔵書を有し、独立性の高い図書業務を進めていた部局にとって、1945年の第2次図書疎開は図書業務の一元化を想起させた可能性も考えられる。大学および学部の図書館業務の史的背景が影響して、戦時中の図書疎開という場面において、文学部独自の方針模索という形で表出し足並みが揃わなかったのではないだろうか。

## 4. その他の部局

### 4-1 人文科学研究所

1939年に設立されたばかりの人文科学研究所でも図書疎開を試みたことが確認できる。附属図書館の第2次図書疎開と同じ時期にあたる1945年7月頃、図書の疎開地として岡山県笠岡町と京都府福知山市を候補地に選定した。当時教授であった清水金二郎<sup>(83)</sup>（法学）と、研究嘱託員であった鳥越憲三郎（宗教史、歴史学）が出張し、現地を訪れた結果、研究所から遠く離れた笠岡町を疎開地に決定した。笠岡町は岡山県西部に位置する瀬戸内海に面した地域で、広島県との県境に近い。

二人は、北村笠岡町長の世話で青年学校や女学校などいくつかの候補地を訪ね、淳和高等女学校（現岡山龍谷高等学校）を選んだ<sup>(84)</sup>。このことから研究所は図書疎開の場所を決める際の方法として、まず適当な地域を決めて、その中で図書を所蔵するのに適切な施設を選出したことが分かる。清水と鳥越はその場で淳和高等女学校校長津田明導と交渉を行い、校舎の一部を借用する約束を取り付けた。このときかなり具体的な約束もなされていたようである。人文科学研究所庶務掛が残したメモによれば、女学校から借用するものとして教室（七）、講堂（一）、小部屋（一）が記録されている。輸送方法については、研究所から笠岡町までは大学側で輸送を担当し、女学校内への搬入

は女学生の勤労奉仕によることも決められた。その他、図書の整理や閲覧のため研究所の教職員が訪れることを想定し、笠岡町にある吉田寺が所員用宿舎として用意されることとなった。

実施に向けた準備が進められるなか、7月末から8月はじめにかけて事態は急転回する。高坂正顕所長名で岡山県内政部長に宛てられた8月6日付文書によれば、「陳者先ニ貴県下笠岡町所在ノ淳和高等女学校ニ舎ノ一部借用ノ件ニ付貴官ノ御了解ヲ可得近々参上可致旨御通知申上置候処今般都合ニ依リ疎開ヲ中止致候間右御諒承被下度候<sup>(85)</sup>」という。

中止の理由は定かでないが、疎開地の遠さが現実的でなかったことは否めない。計画段階では研究所から笠岡町までは民間の運送会社を利用して蔵書運ぶ予定であったが、中止により計画は白紙となった。

1949年に人文科学研究所と合併した東方文化研究所は、当時は京都帝国大学の組織ではなかったが図書疎開が実施されたことが確認できるため付記しておく。東方文化研究所の場合、倉田淳之助(漢文学)の尽力で疎開地を探し出したとされるが<sup>(86)</sup>、1945年8月という実施時期から京都府が疎開地を斡旋したと言える。倉田は1943年3月『東方文化研究所漢籍分類目録』を作成、出版するなど<sup>(87)</sup>、所内の漢籍について所蔵状況を十分に理解していた人物の一人であった。経学文学研究室を運営していた吉川幸次郎や倉石武四郎の指示のもと、疎開図書の目録作成や疎開地の選定を担ったと推測される。

蔵書の梱包や搬出は所員総出で行った。蔵書を収めた178箱は、1945年8月9日、12日、13日に、三好重夫府知事が差し向けた木炭トラックで南桑田郡の山国村国民学校へ運ばれた<sup>(88)</sup>。戦後、1945年10月末に研究所へ返却されている。

#### 4-2 自然科学系

事業の規模は異なるが、戦争末期には自然科学系でも疎開を実施した。自然科学の分野では、精密機械や実験器具を疎開させる研究室疎開のなかに図書疎開も包含されていたようである<sup>(89)</sup>。工学部教授会議事録によれば、研究室の疎開がはじめて議題に上がったのは1945年4月である<sup>(90)</sup>。附属図書館の第2次図書疎開実施時期であり、必要があれば実施するという程度の認識に留まった。

実際に研究室疎開を実施した事例として、農学部農林経済研究室を挙げることができる。1943年10月、徴兵猶予の特典が停止された際、農学部においては農学・農林生物・農林経済の3学科学生は、文科系学生と同じくその対象となった<sup>(91)</sup>。当時教授であった渡辺庸一郎<sup>(92)</sup>(農林経済学)の回顧によれば、研究室と図書の疎開を自ら計画したという。渡辺の個人的なついで疎開先を探し、丹波の府立須知農林学校の収納舎に研究室を移せるかどうか学校長と交渉を進めた。しかし実現には至らなかった。

渡辺が研究室で管理していた図書の疎開は実行された。特に重要な和漢洋書を選択し、北桑田郡周山の民家に疎開させた。物資が欠乏する時期にありながら、専売局の煙草元売捌きの大きな木箱を学生たちが手に入れ、木箱十数個に詰めて疎開させたという。運搬には府農業会のトラックを使用した<sup>(93)</sup>。

その他、理学部でも、図書雑誌と研究実験用機械器具類を滋賀県に所在する石山ボートハウスとその附属宿舎に疎開したことが確認できる<sup>(94)</sup>。医学部では、8月14日に図書の梱包作業が完了した段階で敗戦を迎えた<sup>(95)</sup>。

#### おわりに

本稿で得られた知見を次の三点にまとめる。

第一に、京都帝国大学における図書疎開は、1944年4月に図書館商議会の決議を経て附属図書

館がはじめて実施した。疎開地の選定や疎開図書  
の目録作成など、職員を中心に綿密な事前準備が  
行われた。図書だけでなく図書館機能の移転も意  
図しており、目的や実施時期、方法、規模など附  
属図書館が主体的に判断し実施した。

第二に、附属図書館の疎開図書に含まれる和漢  
書を和漢書分類部門別に分析した結果、教養書が  
非常に多いという特徴が見られた。具体的には「宗  
教哲学教育」部門が最も多く、次に「文学語学」、  
「歴史地理」と続く。秘本や漢方医学書なども含まれた。

第三に、附属図書館の第2次図書疎開は、京都  
府の先導により1945年7月以降に実施された。  
疎開地や輸送手段を府が斡旋した結果、受け入れ  
先は当初予定していた京都市内の寺院ではなく府  
下の国民学校校舎へ変更された。選定された疎開  
地や、大学から疎開地までの距離はいずれも大学  
側が想定していた範囲を超えるものだったと考  
えられる。

以上から、京都帝国大学の特に第1次図書疎開  
について当時の目録二点を手掛かりに具体的な方  
法を明らかにし、第2次図書疎開との主体や方針  
の違いを指摘することができた。洋書や他の貴重  
書類についても同様の方針であったと推測するこ  
とができ、京都帝国大学の図書疎開の全容を解  
明する一助を得ることができた。

以下、今後の課題を二点述べたい。防空という  
空間的広がりをもつ図書疎開事業から見てきた  
ものは京都帝国大学の防空認識であり、さらに戦  
争末期に京都帝国大学の蔵書の保管を担ったのは  
郡部の初等教育機関だったという構図である。こ  
れらは大学の位置する地域性とも関連性があり、  
行政文書や地域資料の発掘・分析も今後求めら  
れるだろう。

次に、東京帝国大学の事例からも推測できるが  
図書疎開に踏み切った背景は大学や各部局によ  
って異なる可能性がある。京都帝国大学の場合  
も、図書疎開を実施した背景を京都大学の歴史  
的文脈

で検討する必要があるだろう。思想弾圧下の戦  
時下において、大学図書館が大掛かりな図書疎  
開を実施した意義については今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり廣庭基介先生に貴重なご  
教示をいただきました。また資料調査にあたり附  
属図書館の赤澤久弥氏に大変お世話になりました。  
ここに記して感謝申し上げます。

## [註]

- (1) 秋岡梧郎『秋岡梧郎著作集—図書館理念と実践  
の軌跡—』日本図書館協会、1988年、清水正三『図  
書館を生きる—若い図書館員のために—』日本図  
書館協会、1995年、奥泉和久『近代日本公共図  
書館年表1867-2005』日本図書館協会、2009年、金  
高謙二『疎開した四〇万冊の図書』幻戯書房、  
2013年。非常に珍しい例だが、東洋文庫の場合は  
図書疎開経験者による詳細な記録が残る(星斌夫『禿  
筆漫録』星斌夫先生退官記念事業会、1980年)。
- (2) 『東京大学百年史』通史二(東京大学百年史編集  
委員会編、1980年) pp.842-846、同部局史四(同、  
1987年) pp.1226-1228、『京都大学百年史』総説  
編(京都大学百年史編集委員会、1998年) pp.459-  
460。戦前期の実質的な総合大学という枠からは  
外れるが『東北大学百年史』通史一(東北大学百  
年史編集委員会、2007年)、『九州大学百年史』通  
史編I(九州大学百年史編集委員会、2013年)に  
も図書疎開の事実が記述されている。
- (3) 京都大学附属図書館の元職員であった廣庭基介  
による研究(「十五年戦争期における京大図書館の  
史的考察」『花園大学文学部研究紀要』41号、  
2009年)は数少ない先行研究であり、戦時期の図  
書館に勤めた先輩司書から著者が聞いたことを二  
次資料で辿りまとめている。
- (4) 図書疎開は文献疎開とも言われ、疎開する対象  
は書籍(和書、洋書)、絵画、貴重品等所蔵資料に  
よってばらつきが見られる。本稿ではそれらも含  
めて図書疎開と称する。

- (5) 東京大学附属図書館月報である『図書館の窓』「東大百年特集号」(173号、1977年)、薄久代『色のない地球儀 資料・東大図書館物語』同時代社、1987年
- (6) 「文部省主催都道府県中央図書館長並図書館事務担当官会議」『図書館雑誌』290号、1944年
- (7) 青野伊豫児「山科へ本の疎開」『図書館の窓』173号、1977年、p60
- (8) 「図書の疎開進む」『図書館雑誌』293号、1944年
- (9) 前掲『近代日本公共図書館年表1867-2005』、pp.113-116。
- (10) 大窪太郎「図書寮本の疎開前後」『書陵部紀要』30巻、1978年、p38
- (11) 同上、pp.38-40
- (12) 第1次は1943年11月に約6万6000冊、第2次は1944年5月に約5万4000冊、第3次は1944年8月に3400冊を輸送した(「帝国図書館蔵書疎開始末記」『国立国会図書館月報』232号、1980年)。
- (13) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B12080779800 (第446画像目から)、「文書及図書類疎開関係雑纂」(N.1.0) (外務省外交史料館)
- (14) 成田図書館編『成田図書館周甲記録』成田図書館、1961年、pp.173-174。当時成田図書館の書庫は耐火構造の煉瓦造であった。
- (15) 鈴木英二『財団法人興風会図書館の五十年』興風会、1991年、pp.57-58。興風会図書館の書庫は大谷石を使った防火構造になっており、所蔵スペースに余裕があったという。興風会図書館では1944年7月1日から1945年8月1日まで保管したが冊数は不明である。
- (16) 1944年3月15日の図書館商議会で「本学蔵書疎散に関する件」が審議された(前掲『東京大学百年史』部局史四、pp.1226-1227)。
- (17) 前掲『成田図書館周甲記録』p174
- (18) 前掲『東京大学百年史』部局史四、p1227
- (19) 前掲『色のない地球儀 資料・東大図書館物語』pp.140-143
- (20) 東京都『東京都戦災誌』明元社、2005年、pp.207-208
- (21) 前掲『東京大学百年史』部局史四、pp.578-580
- (22) 前掲『東京大学百年史』通史二、pp.845-846
- (23) 「京都帝国大学附属図書館商議会規程」(前掲『京都大学百年史』資料編一、p733)。商議会委員は各学部長と各学部の教授1名から構成された。図書館長や司書官は列席し開催は不定期であった。
- (24) 京都大学附属図書館編『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館、1961年、p43
- (25) 同上書、p187
- (26) 実施前に疎開規模が判明していたため第1次図書疎開では図書を1か所に収蔵できないことが当初から分かっていた。防空上の観点からも2か所に分けたほうが安全と判断された(同上書、pp.187-188)。
- (27) 同上
- (28) モリソン文庫(現東洋文庫)の場合、所蔵図書を岩崎家の地方別邸や農場に疎開させた場合の危険性として「地方の治安が混乱した場合には、幾台かのトラックで運ばれたものがあると知った地方人は、それが生活とは何等関係のない図書とは知らず、宝物でもあるかと誤信し襲ひ略奪せぬとは誰が保証し得よう」と懸念していた(岩井大慧「戦火防衛対策について」『図書館雑誌』286号、1943年、pp.600-602)。
- (29) 前掲『京都大学百年史』部局史編二、p452
- (30) 疎開させた和漢書はさらに最貴重書と貴重書の2種類に区分された。最貴重和漢書は約350点、貴重和漢書は3054点である。
- (31) 「凡例」『本館所蔵貴重和漢図書 疎開点検目録 附点検控』(京都大学附属図書館所蔵)(未整理資料)
- (32) 同上資料、目録作成過程の説明(件名なし)
- (33) 前註31
- (34) 重要美術品指定図書(国宝)、洋書を含む。
- (35) 疎開点検目録と疎開荷造目録の違いを整理しておく、書物から荷箱番号を検索したいときは疎開点検目録、逆に荷箱番号から書物を検索したいときは疎開荷造目録が有用であり、二つの目録は点検番号(点検の際、書目に代わる番号)が共通している。
- (36) 「甲地疎開荷造目録」『本館所蔵貴重和漢図書

- 疎開荷造目録』(京都大学附属図書館所蔵資料)(未整理資料)。なお、一つの荷箱に収められた和漢書の平均点数は46.6である。
- (37) 同上資料所収「乙地疎開荷造目録」
- (38) 前註31
- (39) 前註7
- (40) 和漢書以外で大覚寺へ疎開させた館所蔵図書は、重要美術品指定図書(国宝)3点、洋書181点、尊攘堂甲種貴重品32点、古棹堂文庫貴重書77点である。同じく個人宅へは「谷村本」貴重書690点、本館所蔵最貴重洋書65点、尊攘堂乙種貴重品58点、寄託「近衛家本」貴重書980点を疎開させることが疎開文献案には記載されている(前掲『附属図書館六十年史』p188)。
- (41) 附属図書館第2次図書疎開のケースであるが、当時附属図書館司書であった佐々木乾三の戦後の回顧によれば、木炭トラックで疎開図書を芦生演習林へ運ぶ途中、周山街道の途中でトラックが不調になり同町の街道沿いにある寿司屋兼旅館で一泊したという(廣庭基介先生御教示による)。職員がトラックに同乗し付き添っていたことが確認できる。
- (42) 東京帝国大学附属図書館が山梨県にある「青洲文庫」(渡辺邸)へ所蔵図書を疎開させた記録「第二次図書疎開市川大門出張記録」によると、図書の運搬は荷受担当と運搬担当で実施した。荷受役の仕事は鍵の受け取り、関係者への挨拶回り、到着した荷箱の点検、搬入、収蔵状況の確認、鍵の返却である。「到着早々、関係方面へ挨拶に廻った。各方面の疎開図書に対する関心は意外なほど強く、現に前記のように当日現状視察に来庫されたばかりでなく、図書の数量・内容等についてもよく知ろうとする態度が見え、警察からは簡単なものでよいから是非ともリストを欲しいという要求があった」という。搬入後、「西八代地方事務所長・同総務課長、市川警察署長・同特攻主任の諸氏現場視察の為来庫」とあり、関係者への対応を行った(前註7、青野論文)。
- (43) 河合文庫など一部の文庫本には付されていない。
- (44) 前註37
- (45) 1944年5月4日作成文献疎開案(前掲『京都大学附属図書館六十年史』p189)
- (46) 同上書、p172
- (47) 「絵画拝借の件 照会」『自昭和十九年至昭和二十年雑書類図書館』(京都大学大学文書館所蔵識別番号02B15553)
- (48) 同上資料所収「森寛斎筆賀茂行幸図借用方願出ノ件」
- (49) 前註47「遊就館からの書状 1944年12月15日」
- (50) 前掲『京都大学百年史』総説編、p456
- (51) 「図書館所属木造建物の中取壊すべき部分届出の件」『昭和二十年度建物取壊関係書』(京都大学大学文書館所蔵(識別番号01A09542))。実際に取り壊されたかは確認できず、選定のみにとどまった可能性もある(拙稿「戦争末期のキャンパス—木造建物の取り壊し—」『京都大学大学文書館だより』第37号、2019年)。
- (52) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p190
- (53) 同上
- (54) 京都府通牒の発信時期は、第2次図書疎開の対象を調査した「京都帝国大学所属疎開図書冊数並ニ包装個数調」が1945年7月7日付であることから推測した。
- (55) 前註52
- (56) 同上
- (57) 同上
- (58) 1942年7月、府政出張所や駐在職員の業務を統合した地方事務所が郡部に21か所設置された(「地方課 課の機構に関する件」『内政部事務概要』(京都府立京都学・歴史館所蔵)。これらの地方事務所が現地行政の要として現地国民学校への連絡等を担った。
- (59) 府県道知井京都線が重要な理由は、ブナ材や木材、薪炭等を京都市内へ向けて搬出するためであった。京都市内の燃料不足が深刻化し、輸送手段がないまま府下の郡部や出荷駅に留まっていた薪炭をいかに運び出すかが当時問題となっていた(『京都新聞』1944年9月14日)。
- (60) 「内政部長管内要視察箇所調に関する件」『要書綴』1944年(京都府立京都学・歴史館所蔵)

- (61) 『教授会記録 昭和二〇年 昭和二一年』1945年7月6日(京都大学大学文書館所蔵 識別番号03B00064)
- (62) 『知井小学校百年誌』知井小学校創立百周年記念事業運営委員会編、1973年、p16。記述は1944年11月とあるが1945年7～8月の出来事と推測した。
- (63) 『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書 第一巻』京都大学大学文書館編、2006年、p19
- (64) 『教授会記録 昭和19年』1944年2月2日(京都大学大学文書館所蔵 識別番号03B00064)
- (65) 同上資料所収、1944年4月24日
- (66) 前註61
- (67) 図書を疎開する場合、保管者と依頼者が契約を締結することが一般的であったようである。附属図書館の場合も、第1次図書疎開の際に保管所責任者と京大総長との間で保管に関する1年間の契約を締結(必要に応じ期間を延長)することが規定されていた。それによると、保管所責任者の責任は四つある。第一に火災および盗難に対する予防措置をとること、第二に万一空襲や火災、盗難等が発生した場合万全の処置をとること、第三に保管所責任者および京大が指定する公用者以外は保管所に立ち入れないこと、第四に保管所借用料金を定めることである。このように疎開地における保管は基本的に預り先が責任を持つて行う(前掲『京都大学附属図書館六十年史』p189)。
- (68) 前註61
- (69) 「疎開図書寄託証」『自昭和十九年至昭和二十年 雑書類図書館』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号02B15553)
- (70) 支那語学支那文学講座では1945年7月から8月にかけて図書疎開を計画し、そのとき作成された目録が確認される(『支哲文学疎開図書目録』(東京大学東洋文化研究所倉石文庫所蔵))。目録作成は当時の講座教授だった倉石武四郎の指導によるものと推測され、186の荷造り番号が記されている。支那文学講座の図書疎開が附属図書館が取りまとめた第2次図書疎開の一環かどうかは不明である。
- (71) 知井国民学校へ疎開した図書は1945年11月14日、15日両日に返還され、各研究室へ引き渡された(『教授会記録 昭和二〇年 昭和二一年』(前註61資料、1945年12月5日)。なお、芦生演習林へ疎開した図書数は不明である。
- (72) 『庶務関係綴 昭和二〇年度』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号02B07782)
- (73) 「京都帝国大学法学部図書取扱規程」「京都帝国大学文学部図書取扱規程」『本学内規例規関係書類(参考の二) 自明治30年至昭和23年』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号01A00265)
- (74) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』p78
- (75) 篠塚富士男「昭和初期の大学図書館」『大学図書館研究』No.36、1990年、p2
- (76) 同上、pp.1-3
- (77) 1909年2月17日に開かれた第1回附属図書館商議会の議題は「本学図書(各分科ヲ通シ)印刷目録調整希望ノ件」であった。当時の目録カードは手書きであったが、附属図書館内には全学共通で使用できる印刷目録の構想があったことが確認できる。開館後10年目には附属図書館内で既に図書業務の一元化構想が醸成されつつあったと言えよう(前掲『京都大学百年史』総説編、p1206)。
- (78) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』pp.22-23
- (79) 司書の人数は法経文は各2名、医、医院、工理農は各1名とされた。
- (80) 前註75、篠塚論文、p5
- (81) 前掲『京都大学附属図書館六十年史』pp.32-34
- (82) 前掲75、篠塚論文、p5
- (83) 関西学院高商部教授であった清水金二郎は人文科学研究所が設立された直後の1940年3月から専任所員として1948年5月まで在職した。
- (84) 「書状発送に関するメモ」(件名なし)『庶務関係 昭二〇』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号02B11312)
- (85) 同上資料所収、1945年8月6日付文書
- (86) 『人文科学研究所50年』京都大学人文科学研究所、1979年、p65
- (87) 倉田淳之助「東方文化研究所漢籍分類目録解説」『東方学報.京都』第14冊、1944年
- (88) 前掲『人文科学研究所50年』p65
- (89) 九州帝国大学の場合であるが工学部、農学部、

理学部、医学部が研究室疎開を計画する際、同時に図書疎開も試みている。前掲『九州大学百年史』通史編Iに詳しい記述がみられる。

- (90) 『自昭和20年1月至昭和21年12月教授会議事録』(京都大学大学文書館所蔵 識別番号 02B00214) 1945年4月10日。
- (91) 1943年12月時点で徴集された農学部(農学・農林生物・農林経済各学科)の学生は、在学者253名のうち140名であり約半数にあたる(前註63)。
- (92) 1944年12月から人文科学研究所教授兼任。研究所における戦時特別研究の第5班「戦時ニ於ケル農村問題」担当者でもあった(前掲『人文科学研究所50年』p64)。
- (93) 京都大学農学部創立四十周年記念事業会『京都大学農学部創立四十周年記念 歴史を語る』京都大学農学部創立四十周年記念事業会、1964年、pp.112-113
- (94) 前掲『京都大学百年史』総説編、p1026
- (95) 同上、p456。薬学科の研究室は一部疎開したという(『京都大学百年史』部局史編一、p967)